

戦時抵抗と政治犯の釈放

——岩田英一氏に聞く（3・完）



吉田 健二

はじめに

- 1 生い立ちと経歴
- 2 私の戦争期——入党と全協のオルグ（以上、第653号）
- 3 私の戦時抵抗——電気溶接学校の経営（以上、第655号）
- 4 政治犯の釈放（本号）

4 政治犯の釈放

東京高等電気溶接学校の閉鎖

岩田 1944（昭和19）年の11月以降、米軍が日本本土への空襲を本格化しました。とりわけ1945年3月9、10日の東京大空襲はすさまじく、下町一帯が廃墟となった。死者、行方不明者は10万人を越し、熱風や塵埃、異臭は代々木駅そばの私が経営する電気溶接学校にも吹き込んできた。

これより先、1945年2月24日に神田駅周辺に焼夷爆弾が投下され、東口周辺が焼け野原となった。私はすぐに学校の閉鎖を決めた。万が一、代々木駅周辺に爆弾が落とされたら学校に学ぶ昼夜600人余の生徒や、軍工廠と企業からの委託研修生900人が犠牲になる恐れがあった。私は設備資材を日本溶接協会に寄贈し、2月末をもって学校を閉じた。

同じ時期に、小磯国昭内閣が山手線の沿線に建つ住宅・施設の撤去を決めた。いわゆる建物疎開です。1945年4月私の学校も対象となり、

軍事公債5万円の証書と引き換えに接收された。

日本で最初の民間の溶接学校として、私財を投じて設立した学校が取り壊されるのはまことに惜しかった。私は商工省の某局長の紹介を得て陸軍の立川燃料廠長官の大佐に会い、学校建物を兵員や徴用工の宿舎にしたらどうかと提案した。

—— どうしてですか。

岩田 首都防衛は東部軍が担っていた。司令部は米軍の相次ぐ空襲で兵舎が焼失して困っていた。陸軍省は私の提案に飛びつき、磯村英一渋谷区長に建物の取り壊し中止を命令した。

話しは先になるが、私は1947年4月、地方自治法の公布にもとづく東京都議会議員選挙に立って当選した。磯村さんは、安井誠一郎知事に懇請されて民政局長に就任し、都市復興や都民の生活再建に功績を残した。私は敗戦翌日の8月16日に渋谷区役所に磯村区長を訪ね、軍

事公債5万円分の証書を突き返して学校建物の権利を取り戻した。

のちに磯村さんは東京都立大の設立に尽力され、自らも教授として都市政策なんかを講義し、東洋大学の学長もなされた。

紺野与次郎と再会

岩田 戦争が終わって3、4日して、紺野与次郎が私を訪ねて来た。紺野は1932（昭和7）年に警視庁特高課のスパイ飯塚盈延（いづか・みつのぶ）の手引きで検挙され、1943年くらいに出獄したが、私は接触を避けていた。私自身、特高や、渋谷憲兵分隊の監視下にあったからです。

再会した紺野はとても痩せていた。電気溶接学校から新宿までは電車で1分、徒歩で5、6分の距離です。私は用務員を新宿駅西口のヤミ屋に走らせ、牛肉の粕漬け、清酒、きゅうり、枝豆などを調達して彼に振る舞った。

紺野は1931、2年当時、「金子」と名乗っていたと思うが日本共産党の組織部長で、私は彼と連絡をとっていた。紺野は10年余の刑期を非転向で貫いた。彼は再会して開口一番、私に、日本をデモクラシー国家として再建するため労働組合を結成しようと熱く語った。

紺野について言っておきたいことがあります。山辺健太郎が『社会主義運動半世紀』（岩波新書、1976年）で、紺野が転向したと書いているが（同書198頁）、これは断じて事実でない。なぜこういうデタラメを書くのだろうか。紺野に恨みでもあるのだろうか。紺野は転向などしていない。彼の名誉のために言っておきたい。

—— 紺野与次郎の名前が出てびっくりです。紺野さんは山形県荒砥町（現在は白鷹町）の出身です。紺野家は県南の西置賜（にしおきたま）地方でも知られた資産家で、養蚕仲買業

や最上川の船運に関わる事業を営み、門前に長井警察署の駐在所が置かれたくらい有力でした。

岩田 よく知っていますね。

—— 郷里が隣の長井市なのでうわさ程度に聞いています。

岩田 紺野が、山陰地方の大地主で、親父が貴族院議員だった米原昶（よねはら・いたる）の実家ほどでないにしても、地主の出であったことは承知しています。

日本共産党に関係する人で、戦前において労働運動の経験があるのは渡辺政之輔、川合義虎、谷口善太郎、細谷松太、河田賢治らの古参や、紺野与次郎、春日正一など何人もいない。紺野は私より3、4歳下ですが、労働組合の運動に一家言があり、当時は労働運動の理論家として知られていた。

—— 紺野さんは自らの活動について「昭和初年の共産党」というテーマで証言されていますね（安藤良雄編『昭和経済史への証言（下）』毎日新聞社、1965年）。

岩田 あれは私も読みました。しかし紺野は日本労働組合評議会のオルグとして活躍した東京合同労組の結成や、党の軍事部門、また満州事変期＝衰滅期の日本共産党の動静について話していない。

なぜ証言を避けたのか——推測できますね。当時、紺野は宮本体制のもとで党の幹部会員に昇進するかどうかの微妙な時期だった。

徳田球一の人事

岩田 紺野与次郎は1945年12月1日、日本共産党の第4回大会で中央委員に選ばれた。前月11月8日における全国協議会の時点で、紺野は労働組合対策の責任者になる予定だった。ところが紺野はその直後に九州地方における組織活動の責任者となり、代わって神山茂夫が農民部長を兼ねて労対の責任者になった。

ところが神山が神経衰弱で、勃興する労働運動の先頭に立てなかった。代わって1945年11月に石井鉄工所の争議を指導し、「5倍賃上げ」を勝ちとって名をあげた伊藤憲一が責任者になった。

徳田の党人事における問題点の一つは、紺野を労対の部署から外したことです。伊藤憲一は若く、威勢があった。しかし彼が口癖のように言っていたけれども小学校もろくに出ていない。彼に学理やリーダーとしての実績もない。伊藤は、GHQや日本政府と対峙して労働運動のかじ取りを担うのに責任が重かった。

4、5か月後に、こんどは徳田の知恵袋・長谷川浩が労対の責任者になった。私が言いたいのは党人事を非転向や、東京帝大出、如才なさ、威勢がよい、といった基準で決めてはならないということです。

私は占領期に長谷川浩が煽った生産管理闘争——これは徳田が獄中で構想した戦術といわれているが、この戦術や、長谷川と伊藤律が煽った隠し田摘発闘争や社共共同運動にも反対した。1949年、GHQが日本政府に指令した政治団体の届出制や会員登録制にも2人は「いいじゃないか」とその意図を理解することなくこれを認めた。

—— 団体等規正令のことですね。

岩田 そうです。私は団体等規正令について、断固反対すべきだと徳田に直言した。公務労働者に対する弾圧や、のちに吹きまくるレッドページはこの団体等規正令の公布に原点がありました。

新日本建設へ決起を促す

岩田 私は紺野与次郎と再会したのち、電気溶接学校の卒業生5,000人と孫弟子（工場・事業所からの委託研修生の意味——编者注）を含めると5万人を超す卒業生に、新日本の建設に

向けて決起を促す広告を出した。これが、私が1945年8月23日付「朝日」（東京本社発行、第1面）に出した広告です。8月20日に投稿しました。

—— 「1945年8月29日午前9時、本校講堂集合、弁当持参」と出ていますね。

岩田 同窓会は盛況で、当日は日立市、川崎市など関東一円から卒業生が集まった。まず教師陣を代表して造船溶接界の権威、東京帝大の木原博先生が「日本産業の復興」と題して講演しました。

午後は、議題の（3）「現在将来、我々ハ如何ニ生クベキカ」について討議した。冒頭で私は、日本が技術立国をめざし、諸君が修めた溶接技術をもって産業復興に貢献し、また労働組合を結成して生活と権利を確立しなければならないと訴えた。

ところが討論がかみ合わないのです。卒業生は産報＝産業報国会について知っていても、少し前の総同盟、評議会、全協も、また労働組合という言葉すら知らない。私が紺野与次郎と『労働組合の知識』（「紺野英一」名で出版、文苑社、1945年）を著したのはこのためなのです。

ギラン記者の府中刑務所訪問

岩田 1945年10月3日朝、私は「読売」（東京本社発行、第2面）に出ていた「外人記者、獄中の共産主義者訪問」という記事を読んで仰天した。なんと徳田球一、志賀義雄、往年の指導者・三田村四郎らも府中刑務所内の東京予防拘禁所棟に収容されているという。これがその記事です。

「読売」の記事は、1945年10月1日午後、AFP＝フランス通信社のロベール・ギラン記者、同社の極東支局長マルキュース、アメリカ『ニューズ・ウィーク』誌のアイザックス記者

の3人が府中刑務所を訪問し、徳田や志賀らと2時間にわたって会見した内容を紹介していた。私にとって、まさに腰を抜かすほどの衝撃的なニュースだった。

戦争中、特高警察や憲兵隊の抑圧はまことに厳しいものだった。だから私は獄中幹部に対して頭の片隅に万が一の事態を想定していた。ところが徳田らが意気軒昂で、日本共産党の再建について検討を重ねていた。

徳田球一と面会

岩田 私は記事を読み、徳田が日本共産党の再建についてどう考えているのか聞こうと思い、すぐに府中刑務所を訪ねることにした。また面会のさい私が党員だった証として、世田谷区代田1丁目635番地の自宅物置の地下に隠し持っていた「赤旗」の包から、三二テーゼを収めた1932年7月2日付特別号など十数号を持参した。

—— 面会できたのですね。

岩田 できました。守衛は面会を拒んだ。受付で押し問答をしていると奥村とかいう所長だったと記憶するが、やって来て、本庁の許可を得ていない、根田兼治という東京予防拘禁所の所長も留守だと言いつた。

ところが私より先に、UP通信社の記者やGHQの係官ら3人が徳田と面会を求め、これが認められていた。私はハッターリをかまして「徳田とは親しい友人だ。外人記者に認めてなぜ私に認めないのか」と断じた。そこに徳田と志賀が面会所にひょっこりやって来た。

徳田が検挙されたのは1928（昭和3）年2月で、私が入党したのは1932年4月です。だから面識はない。徳田とは1932年6月に、統一公判廷を傍聴したさい顔を見ただけです。

私は持参した「赤旗」の包を渡した。徳田は、包んでいた油紙の匂いを鼻で嗅ぎ、開いたとた

ん「おっ」と言って絶句した。また徳田はなにか思いをめぐらして「君も頑張ったのだね」とねぎらってくれた。私はうれしかった。

私はこの日以降、10月10日に「府中組」が出獄するまで10月5日をのぞいて毎日府中刑務所を訪ね、10月4日、6日、9日は予防拘禁所棟の黒木重徳の房に泊まりました。

山崎早市記者

岩田 府中刑務所に徳田ら「予防拘禁組」が収容されている事実をギラン記者に伝えたのは、同盟通信社の山崎早市（やまざき・そういち）という記者です。山崎記者はのちに同盟通信社の分割にともなって時事通信社に移籍しましたがけれども、占領期の日本社会運動において評価されてよいと思いますね。

—— どんな点で？

岩田 昨年9月（1990年9月14日）、栗林敏夫弁護士が亡くなりました。栗林先生は人権派の弁護士で、左翼の色合いはなく、1933（昭和8）年に日本共産党におけるリンチ殺人事件＝スパイ査問事件において宮本顕治の弁護人を務めたことで知られています。また先生は大審院の改革、すなわち最高裁の設立の委員をなされた。

その栗林弁護士が生前、山崎記者のことについて「まことに誠実な記者でした」と述懐しておられた。私は1932年にも検挙され、先生の尽力により勾留29日で釈放となった経緯がありました。

山崎記者は、栗林先生が敗戦の日1945年8月15日に、昭和天皇の「終戦の詔勅」の放送を聞いたのち遅い昼食をとっていたとき、彼が麹町区（現在は千代田区）富士見町1丁目の栗林先生の自宅を訪ねて来て、市川正一や徳田球一らの消息を教えてほしい、と申し出たそうです。「終戦の詔勅」の放送から1～2時間後の

ことだったそうです。

山崎記者の思いについて知るすべはないが、彼は、同盟記者という身分を利用して戦争が終結する以前から司法省や内務省に通い、また旧左翼の転向者とも接触して政治犯の所在確認をしていたそうです。

ギラン記者と山崎記者は知り合いで、懇意だったようです。山崎記者はフランス語に堪能で、私がギラン記者から取材を受けたときはフランス語の、またUP通信やAP通信の記者から取材を受けたときは英語の通訳をしてもらいました。

山崎記者はある時点で、たぶん1945年8、9月中に栗林弁護士や、太田慶太郎、泉盈之進、内野竹千代らから得ていた情報をギラン記者に伝えた。この情報が、ギラン記者における歴史的なスクープとなった。

—— ギラン記者は徳田球一ら府中刑務所に収獄中の政治犯について、AFP通信を通じてこれを世界に打電しました。このギラン記者らのスクープはGHQも動かしました。

岩田 そうです。GHQは1945年10月4日夕刻、人権指令を発して日本政府に政治犯の釈放を命じました。

私は1986年11月、ギラン記者が現役を引退するということでパリから来日したさい、案内



ロバール・ギラン記者と
(1986年11月12日、日仏会館)

があつて日仏会館で開かれた歓迎会に出席しました。

私はギラン記者から数回、山崎記者の通訳で、日本共産党本部の土地と建物の寄贈の件や、1946年1月の板橋事件——隠匿物資摘発闘争、また同年5月12日と14日の2回、食糧問題の解決で昭和天皇に直訴するため皇居にデモをかけた件で取材を受けたことがありました。ギラン記者は、たぶん私のことが記憶に残っていたのだろう。案内を受けて、私自身びっくりしました。

山崎記者についてこのことも評価したい。第1次読売争議の最中に、だから1945年10月か11月のことですが労農記者会という記者クラブができました。メンバーは朝、毎、読に日経とNHKの記者が中心だった

労農記者会は、山崎記者が、日本労農通信社の浅川謙次らと設立したもので、占領期における労農情報の収集・発信の拠点となっていた。

政治犯が釈放されたのち、社会運動が1、2か月で燎原の火のごとく燃え広がった裏に労農記者会の存在がありました。労農記者会は週に2回、月曜日と金曜日に、頻発する労働争議、農地改革の進捗、締結された労働協約などの事例や情報を紹介していた。

—— 岩田さんは山崎氏とどのような関係だったのですか。

岩田 私は取材の対象者で、特別の関係などない。私は1945年、46年4月の時点で日本共産党の入党事務係、市民対策部のメンバーで、隠匿物資摘発の闘争や食糧闘争を指導していた。山崎記者は情報を収集・配信するため、頻繁に私に取材に来ていました。

山崎記者と伊藤律

岩田 山崎早一記者は第一高等学校で伊藤律の先輩にあたり3、4歳年上だったらしい。

占領期の日本共産党において伊藤律の権勢はすごかった。伊藤は、徳田や、徳田の参謀だった長谷川浩をバックに34、5歳で中央委員、書記局員となり、飛ぶ鳥を落とす勢いだった。その伊藤が山崎記者に「先輩、先輩」と言い寄っていた。

——なぜです？

岩田 情報が欲しかったからです。1945年11月に、亡命中の野坂参三が中国・延安から帰国するというニュースが伝わった。これを機に伊藤は徳田や志賀に対して待機の姿勢で臨み、東京地方委員会の会議に出て来なくなった。伊藤は長谷川の推薦で委員となり、三多摩地区におけるオルグ活動の責任者になっていた。

私は1945年11月のある日、志賀義雄から伊藤がこのところ東京地方委員会の会議に出て来ないがどうしてなのかと尋ねられた。当時伊藤は世田谷区池上の借家に住み、同じ区内だったので私は彼を訪ねたが、要領を得ない返事だった。

野坂は年明けの1946年1月に帰国した。野坂は1月14日に党の中央委員会との間で共同声明を発表したが、伊藤は当初「野坂派」として立ち振る舞っていた。ところが第5回大会を準備する過程で、党内における徳田の地位が不動のものとなった。また野坂についてもよからぬ噂が立った。

伊藤はこの事態に、野坂を見切って徳田に乗り換えた。伊藤は、こんどは山崎記者から得た情報を逐一、徳田と長谷川に報告していた。

日本共産党における伊藤律の権力掌握の源泉は、如才なさ、「府中組」に対する取り入りの巧みさだけでなく、山崎記者が提供する情報それ自体にあったと思います。当時GHQや、同盟通信社——のちの共同通信社と時事通信社に入ってくる外信、内信の情報は、共産党においても重要だった。伊藤律はこれらの情報収集

にとっても熱心だった。

他方で、共産党は自らの方針や情報をひろく発信する必要があった。当時「赤旗」は不定期刊、あるいは週刊紙で、日刊となったのは1947年10月からです。「前衛」（1946年2月15日創刊）だって20～30頁くらいの薄っぺらな雑誌だった。

こういう事情もあって、日本共産党はまずは党再建の重要拠点として、通信各社や朝、毎、読の全国紙、またNHKなどに党員記者の確保と細胞を結成することを優先した。新聞単一（日本新聞通信放送労働組合の略称、1946年2月9日設立——編者注）は實際上、共産党がオルグして結成したのです。

産別会議の結成について

岩田 占領期の日本労働運動は、ナショナルセンターのレベルにおいて左派の産別会議が右派の総同盟を圧していました。新聞単一はこの産別会議の生みの親なのです。日本共産党は総力をあげて新聞単一の結成に努め、新聞単一をテコに産別会議を結成しました。私は党の組織活動指導部のメンバーとして、この産別会議の結成に少なからず関与しました。

この件も話しておこう。生前、伊藤憲一が産別会議について「俺が結成した」と吹いていた。伊藤が、産別会議の結成に音頭を取った関東労協（全関東地方労働組合協議会）の議長だったから、こうした発言になったのだろう。

これは断じて事実でない。産別会議の結成は評議会や全協の路線の延長線上にあり、なにも伊藤が考案・構想したものではない。実際は、細谷松太、長谷川浩、春日正一や、当時「朝日」の論説委員で入党したばかりの聴濤克巳（きくなみ・かつみ）らが中心となって、またGHQのセオドア・コーエンという労働課長の協力を得て結成したのです。

GHQは産別会議の結成を後押ししました。けれども産別会議の問題は別のところにありました。大正期以来、労働組合の現場に身を置いて活躍した細谷松太と、若輩で、東京帝大を出ていたが何ら経験、実績のない長谷川浩との間で労働組合に対する理念が違っていた。

—— どんなふうにですか。

岩田 細谷松太は労働組合における自主・自立性を重視していた。だから細谷は共産党におけるフラクション指導や組合支配に反発し、のちに産別民同を旗揚げしたのです。他方、長谷川浩はフラクション指導を容認しこれをつよく主張した。

私は占領期の日本労働運動において、組合の自主・自立性や現場の実態を考慮しない、長谷川ら党の労対幹部の急進さや稚拙さ、指導経験のなさを問題にしたい。政党と労働組合の関係は、主従・上下の関係や指導・被指導の関係じゃないのです。

顧みて、産別会議の運動に組織運営や実践においていくつか問題がありました。

誤解しないでくださいね。私は、占領期に日本労働運動を主導した、産別会議それ自体の存在や意義を認めないと言っているのではないのです。産別会議は新しく生まれた日本国憲法の理念を体現し、これを実践する主体として新憲法の理念の定着化に貢献しました。私の願いはただ一点、産別会議の理念や労働者の連帯の精神を21世紀にならんとする現在にも厳然として残したかった。

党本部の土地と建物を寄贈

岩田 日本共産党は1945年12月1日、渋谷区千駄ヶ谷4丁目714番地の現在の党本部において第4回大会を開催した。じつに19年ぶりの大会だった。

私は感慨ひとしおだった。会場となった党本

部の土地と建物は私が寄贈したもので、1945年2月まで東京高等電気溶接学校だった。

私は先に10月4日にも府中刑務所に徳田を訪ねて面会し、学校の土地と建物を寄贈してもよい旨を伝え、10月6日に土地登記簿と建物の図面を持参して正式にこれを寄贈した。本部となった土地のみで500坪を越す。

徳田は大変喜んだ。だって共産党はそれまで非合法の存在だった。それが現在のJR山手線、中央線、総武線の代々木駅そばに堂々と本部を構え、屋上には特大の赤旗が揚げられた。

私の電気溶接学校はもとは映画館で、新宿駅のホームからも見えました。私はこれを2階建ての校舎に改築した。冬場に、屋上から眺める富士山はまことに秀麗だった。

私は電気溶接学校の土地と建物を寄贈したさい、徳田から本部にふさわしい建物にするよう改築を頼まれた。全体に鉄筋を入れて補強し、間仕切りをして部屋数を確保した。かかった費用は約6万円です。私はこの改築費も負担した。

戦争が終わって1か月もしないうち、もうヤミ経済が始まっていて、鉄筋や塗料、工賃が1日ごとに値上がりしていた。私は徳田の申し出に応えられるかどうか、すなわち費用を負担できるか心配でならなかった。

ほかに私は1945年10月6日、府中刑務所で徳田に土地登記簿と建物の図面を渡すとき現金で1万円を、10月10日に「府中組」が国分寺町の司法省の免囚施設・自立会館に当座の居を定めたときにも黒木重徳に祝儀として1万円を渡した。黒木は風呂敷に包んだ1万円分の札束を見てポカンとしていた。私が寄付・拠出した金額は土地・建物を除き、合わせて15、6万になります。当時はとてつもない金額でした。

—— 現在ではどのくらいですか。

岩田 換算したことがないですね。敗戦の時点で、逓信省の吏員の本俸が30歳で90円くら

이었다。ちなみに当時1万円で、世田谷区代田1丁目に土地100坪、樹齢5~60年の松の木を庭に植え、池が付いた邸宅を買うことができました。

党員の寄付

岩田 かつて京都帝大の先生で、講座派の経済学者だった人に山田勝次郎という人がいます。山田先生は、元東京帝大の法学部教授だった蠟山政道の実弟です。蠟山先生は戦後、お茶の水女子大学の学長をされていますね。

山田先生は入党にあたって、自らの資産を処分して3、4万円を党に寄付しました。当時これがマスコミで報じられ、話題になりました。

蠟山家も、先生が養子に入られた山田家も草津電鉄や養蚕業、倉庫業、山林業、温泉業を営み、群馬県内でも有数の資産家だった。

他方で、幹部連中も競ってカンパをしました。私の記憶では長谷川浩が5万円を、保坂浩明=金兼吉が6万円を寄付しています。

保坂は先にも話したが電気溶接学校の卒業生で、戦争末期に埼玉県や蒲田で溶接棒の工場を経営し蓄財していた。長谷川も鉏路刑務所を出たのち、東京・蒲田で機械工場を共同経営して事業に成功していた。

これは、保坂の遺稿集『保坂浩明——自傳と追想』（編集・発行人保坂典代、1985年）に書かれていないがぜひ紹介したい。

—— どうぞ。

岩田 当時「赤旗」の主筆は志賀です。志賀が何かの本に書いていたけれども、「赤旗」第2号と3号の製作費や用紙の購入費も保坂が全額これを負担しています。けれども『日本共産党の60年』（1982年）など宮本体制のもとで編まれた党史は、私の件——党本部となった土地建物の寄贈や金銭の寄付を含めて一切これを紹介していない。

GHQ人権指令の伝達

岩田 1945年10月4日、私はこの日も府中刑務所を訪ねた。当日は、神道寛次弁護士のお奥様に縫ってもらった赤旗二流を持参した。

自宅に赤色の布地1反がありました。我が家のミシンが不調だったため、先生宅に立ち寄って奥様にシンガーミシンで縫ってもらい、私がそれに「日本共産党」と墨書して仕上げました。

「府中組」は私が持参した赤旗に歓声をあげた。松本一三と山辺健太郎は赤旗に頬ずりし、自らを包んではしゃいでいた。

私は当日、山辺に府中刑務所を案内してもらった。山辺は各棟を自由に通行できる鍵を持ち、これを腰にジャラジャラとぶらさげていた。政治犯でない者が府中刑務所の監房を渡り歩いたのはたぶん私だけでしょう。

—— 刑務所内は「解放区」となっていたのですか。

岩田 8月15日以降、実態はそうだったようです。だって刑務所は彼らに所内の自由通行を認め、GHQが人権指令を発する前に松本一三なんか外出していたのです。

このことも話しますね。GHQの人権指令が「府中組」に伝えられたのは、1945年10月4日夜8時過ぎのことで、遅い夕食をすませて駄弁っていたときのことだった。徳田らが予防拘禁所の所長に呼ばれ、10分ほどして黒木だけが慌ただしく戻って来て「GHQが夕刻6時に、政治犯の釈放を日本政府に命令した。われわれは本日をもって釈放された」という内容の報告をした。いっせいにうおーと歓声と拍手がわき上がりました。東京検事局からの釈放指揮書も、明日午前中に発行されるという報告もあった。

これ以降、私もなんら制約なく、守衛に右手をあげて刑務所に入ることができました。日本の政治犯は、1945年10月4日午後6時をもつ

て完全に自由の身となりました。

なお、年表などで、徳田らが10月10日に釈放されたという記述をよく目にします。これは間違いです。「府中組」の釈放は10月4日のことで、当日以降いつでも出獄できました。「府中組」は自らの意志で10月10日に出獄を延ばしたのです。彼らは10月5日から全員、外出が自由となりました。

言い忘れるところでした。私が持ち込んだ赤旗二流のうち、1つは府中刑務所の煙突に、もう1つは徳田の監房前の廊下の天井に吊るしました。所長からはなんら御咎めがなかった。日本で最大の刑務所に赤旗がなびくなんて、まさしく「革命」前夜の様相で痛快でした。

黒木重徳について

岩田 1945年10月4日、GHQが人権指令を発した当日、私は「府中組」の夕食に招かれた。たぶん電気溶接学校の土地と建物を党に寄贈してもよいという申し出に、黒木が気を遣ったのでしょうか。

席上、黒木が私について「岩田さんは京浜合同労組の書記長で、全協・日本一般使用人組合のオルグでした」とみんなに紹介した。黒木は「府中組」のまとめ役で、合法再建時は日本共産党において中央委員、書記局員で、事務部門の責任者でした。

—— 早逝されたそうですね。

岩田 そうです。黒木は戦後第一回総選挙（1946年4月10日実施——編者注）に東京第一区から立った。3月16日午後2時に、日本橋・三越デパート5階ホールで各党候補者の立会演説会が開かれ、黒木は演説中、脳溢血で倒れて急死した。黒木は壇上で、私のすぐ目の前でぱたんと倒れた。息をのむ驚愕の出来事だった。

黒木は獄中であって、あるいは出獄後も党中

央のど真中にいた。徳田も志賀も彼に絶大な信頼を寄せ、また頼り切っていた。

のちに「宮本派」に転じた松本一三（まつもと・かずみ）が黒木について、豊多摩刑務所や府中刑務所における獄中の細胞活動が黒木を中心になされ、また「黒木は重厚で柔軟性に富んだ、優れた共産党員であった」と述懐し、学識・人格を含めて評価しています（豊多摩〈中野〉刑務所を社会運動史的に記録する会編『獄中の昭和史』青木書店、1986年、187頁）。

黒木の急逝は共産党において痛恨事だったと思う。もし黒木が占領——戦後期に生を得ていたなら、宮本顕治も彼を高く評価していたのだし、長谷川浩や伊藤律、また火炎ビン闘争をすすめた志田重男や小松某らがのさばることもなかったと思う。50年分裂も避けられたかもしれない。

当日の夕食はウサギ丼でした。なんと白米のご飯に肉が山盛りされ、まことに美味だった。きのこ汁も出て、まことに贅沢な夕食だった。食事中、私は復党を申し出て、拍手をもって承認された。私は日本共産党において復党第1号です。推薦者は徳田球一と黒木重徳です。当夜、私は黒木の監房に泊まりました。

「府中組」の出獄

岩田 1945年10月10日午前10時、徳田球一、志賀義雄、金天海（本名・金鶴儀）ら「府中組」における政治犯16名が出獄しました。10時ちょうどに正門の鉄の大扉が開かれ、徳田らが顔を見せるや、参集者からいっせいに「出獄万歳！」「解放戦士万歳！」の歓声が上がりました。

当日私は参集者の受付や、午後1時から芝区田村町の飛行館で予定されていた歓迎集会の準備でてんでこ舞いだった。

本日は、出獄時における「府中組」の写真を

お見せしましょう。この写真は「府中組」が出獄の直前、徳田の監房の前で撮影したものです。この写真に私も写っています。

—— どこにですか。

岩田 徳田と志賀の間に入って、私が持参した赤旗を掲げているのが須藤末雄です。須藤の後ろで、帽子をかぶっているのが私です。またこの写真は出獄式が終わって、参集者が雨のなかデモ行進が始まる直前の写真です。

—— 貴重な写真ですね。

岩田 先年、国会図書館の調査及び立法考査局の方が、食糧メーデーや、昭和天皇に面会をもとめて皇居に入った話を聞きたいと言って来られ、求められて、私が府中刑務所に持ち込んだ赤旗を寄贈しました。

その方にこれらの写真や、私が収集したポスターとビラ——ビラについてはこれを糊付けしたスクラップ帳6冊を寄贈してもよいと申し出たが、もう何年も連絡がないのです。

—— 大原社研は1919（大正8）年以来、日本の社会運動に関する図書や文書資料、またポスターや写真、ビラなども収集してこれを保存・公開してきました。ぜひ研究所にご寄贈いただければと存じます。

岩田 そうしましょう。

—— ところで「府中組」の出獄は400人で出迎えたそうですね。

岩田 違います。出迎えた人は800人くらいで、過半の400人が朝鮮人だったということです。当日私は松本一三と出獄する10分前まで受付を手伝い、帳面に番号をふって氏名、住所、所属を書いてもらい、寸志を持参した人については名前の上に二重丸を付けていました。

朝鮮人が多かったのは、志賀義雄と金天海から布施辰治、上村進、栗林敏夫、梨木作次郎ら弁護士や、中西伊之助、金斗鎔らと連絡を取って準備するよう念を押されていたからです。

私と松本一三は新宿駅西口に近い、淀橋にあった朝鮮奨学会という団体の会館で金斗鎔や、もう1人の金、また名前を思い出せないが全協・日本土木労組のオルグだった朝鮮人の某氏らと会合を重ね、動員方について相談した。この会合に中西伊之助、泉盈之進、内野竹千代、椎野悦朗、服部麦生、高橋勝之らも出席しています。

少し脱線します。私は日本共産党の再建時に、金斗鎔とは同じ中央委員候補だったので戦後の2、3年は昵懇の間柄でした。金斗鎔は東京帝大に在学中、ソウルで先輩の金俊淵に会い、彼の助言で新人会に入ったそうです。

—— 金俊淵？

岩田 そうです。金俊淵は東京帝大時代に志賀義雄と同期で、新人会において活動を共にしていたそうです。金俊淵と金斗鎔、また志賀と金俊淵について表に出ない関係があるようです。

たぶんそんな経緯で、志賀は私や松本一三に対して、出獄式の準備においては金斗鎔らと相談するよう指示したのでしょう。

「府中組」の出獄式は金斗鎔の歓迎の辞で始まりました。金斗鎔はまことに知的な左翼でした。彼は絶叫などせずに、含むように「府中組」における18年余の獄中生活を慰勞し、その不屈の闘争を称賛し、また新時代の到来における日朝人民の連帯を訴えていた。

私が感動したのは、金斗鎔が「出獄戦士万歳！」「日本共産党万歳！」と言って歓迎の辞を結んだことです。

出獄式はこのあと、徳田、志賀、金天海の順で挨拶と決意表明がありました。徳田と志賀の挨拶は、天皇制のもとにおける抑圧・暗黒の政治を糾弾し、人民戦線を結成して天皇制を打倒し、デモクラシーの日本、人民共和制の日本を樹立しようと訴えていた。

金天海の挨拶は急につよくなった雨音でかき

消され、よく聞き取れませんでした。彼は朝鮮民族においても新時代——自主・独立の時代が到来した、（日本共産党と）連帯して頑張ろうというような話をしたと記憶する。

—— 出獄式の挨拶において、金天海が「日本帝国主義と軍閥の壊滅、天皇制の撤廃」をよく叫んだ、と朴慶植さんが書いていますね（『解放後在日朝鮮人運動』三一書房、1989年、52頁）。

—— そうかな……。その朴慶植という人は出獄式に出席したのですか。むしろ金天海の演説は、朝鮮民族において新時代が到来したことを強調し、日本共産党と連帯して民主主義人民の新国家を樹立したい、そこに力点があったと思いますね。

「府中組」の出獄について、松本一三が手記「出獄前後——十月十日の思ひ出」を書いています（『アカハタ』第67～69号、1946年10月2、5、13日付）。私は松本の手記を切り抜き、このようにスクラップ帳に貼って、思い出しては読んでいるのです。

「府中組」の出獄式は、徳田、志賀、金天海の演説が終わったあと、司会役の金斗鎔がデモ行進を行うことを提案し、実行に移された。

肌を刺すような冷たい雨のなかでした。参加者は、府中刑務所の正門前や街路を数回うねったあと、府中駅までデモ行進をしました。これは戦後日本におけるデモ第1号です。

私は、午後における自由戦士出獄歓迎人民大会の設営準備があつてデモには参加していない。私は出獄式が終わるや、木炭トラックで芝区田村町の飛行館に向かいました。

自由戦士出獄歓迎人民大会

岩田 1945年10月10日——「府中組」が出獄したこの日は、日本社会運動が再出発した日でもあります。当日、出獄式における徳田、志

賀、金天海の挨拶は雨のため短縮され、時間にして40分ほどでした。

当初、日比谷公園で、釈放された政治犯が一同に集う集会——自由戦士出獄歓迎人民大会が予定されていた。集会の実施については、公園を管理する東京都の了解も警視庁の許可も得ていた。申請は私が出した。

この集会は、解放運動犠牲者救援会と自由法曹団の弁護士を中心に、在日朝鮮人のグループも加わる形で準備しました。私は黒木重徳に求められ、実行委員の1人として集会設営の責任者をつとめた。

解放運動犠牲者救援会は、私が労農黨員だった1928（昭和3）年に結成された。野田醤油争議（1927年9月16日～28年4月20日——編者注）や、3・15事件など治安維持法違反事件で検挙された被告の救援を目的に結成され、布施法律事務所や、上村進弁護士、梨木作次郎弁護士、太田慶太郎、泉盈之進らが事務局を運営し私も会員でした。

さて、自由戦士出獄歓迎人民大会は、昨夜からの雨が本降りとなったため会場を芝区田村町の飛行館（現在の住居表示は港区新橋1丁目18番1号で、名称は航空会館——編者注）の講堂に変更された。だから設営は一からやり直しとなり、私は警視庁や、来賓、弁士への連絡でてんでこ舞いでした。

なお会場の変更について、前日のうちに手を打っていました。実行委員会は前日中に、府中刑務所、朝鮮奨学会の会館、梨木弁護士の事務所において会合をもち、式次第や、大雨で屋内集会になった場合の会場をどこにするかについて相談しました。

集会は事前に、日比谷公園で開催するむねを関係者に連絡し、これが新聞でも報じられていた。だから会場を変更するにしても、日比谷公園の周辺でなければならない。日比谷公会堂は

改修中で、日赤講堂もそうで予約がとれなかった。

私は集会における会場設営の責任者です。はたして飛行館はどうか——私は電気溶接学校の経営で面識があった某退役陸軍少将に連絡し、飛行館の講堂の利用について尽力をお願いした。

飛行館は、民間の大日本飛行協会が運営していたが、軍部とくに陸軍が設立に協力し後援していた。さいわい飛行館から仮予約をもらい、私は胸をなで下ろした。私は夜遅く府中刑務所に走り、大雨となったばあい会場を飛行館に変更しその準備も整ったむねを黒木重徳に報告した。当夜は黒木の房に泊まりました。

集会においても一つ、思わぬ事態が起きました。徳田、志賀ら「府中組」の幹部連中が、黒木もそうですが、米第8軍の諜報機関に、竹前著『占領戦後史——対日管理政策の全容』（前出）によれば、米第8軍第1騎兵旅団司令部（旧中野憲兵学校）に尋問のため連行され、集会に出席できなくなったのです。2人は集会の目玉になるはずだった。

——「獄中18年組」ですからね。

岩田 そうです。さて当日の集会です。飛行館5階の講堂は定員が600人だったと記憶する。講堂は超満員で、通路、各階の廊下、飛行館の玄関や周辺の街路にも参集者があふれていた。

——「朝日」は聴衆が2,000名と報じていますね（東京本社発行、1945年10月11日付第1面）。

岩田 それは、会館内の通路や階段、また街路に集った参集者を合わせての数字でしょう。とにかく飛行館の講堂に、あるいは玄関前や街路にも赤旗や太極旗が振られ、「解放戦士万歳！」「戦争犯罪人を処罰せよ！」といったスローガンが繰り返し唱和された。

布施弁護士の挨拶

岩田 集会は午後2時半に、布施辰治弁護士への歓迎の辞で始まりました。先生は日本弁護士界の長老で、山崎今朝弥先生とともに明治以来いくたの騒擾事件の弁護や、人権救済の活動をされてこられた。

——布施弁護士は、朝鮮人に変な尊敬されていたそうですね。

岩田 だからでしょう、先生が登壇されたときは盛大な拍手が起こり、司会役の上村進先生がこれを止めるのに困っていた。布施先生に対する割れんばかりの拍手は、集会における熱気を示すだけでなく、先生へのかぎりない尊敬の念の表れだったと思います。

布施先生の歓迎の辞は格調高いものでした。先生は直接に天皇制打倒を叫ばなかったけれども、治安警察法と治安維持法のもとで多くの労農市民が政治犯として捕えられ、人権が蹂躪されてきたことを問題にし、あわせて戦後における日本をデモクラシーと平和の国家として再建したい、ともに頑張ろう、という趣旨で挨拶を結びました。

栗木敏夫、梨木作次郎両先生も演壇に立ちました。両先生は演説というより政治犯の釈放に関する取り組みの経過報告で、GHQにおける人権指令の意義についても話された。

これは栗木先生の報告中に、もしかしたら伊藤憲一の演説中だったかもしれないが、宮本顕治が前日（1945年10月9日）に網走刑務所から釈放され、上京の途についたという報告がありました。講堂全体にうおーっ、と歓声や拍手が鳴り響きました。

各弁士——天皇制打倒を主張

岩田 集会で印象的だったのは、中西伊之助、金斗鎔、伊藤憲一ら実行委員会のメンバーのほか、横浜刑務所を出た酒井定吉や、神山茂夫の

弟の神山利夫らが次々に演説し、天皇制の打倒を叫んでいたことです。

1週間前（1945年10月3日）に、山崎巖内相や岩田宙造法相が治安維持法の撤廃は考えていない、むしろ共産主義者に対する取締まりを強化する、予防拘禁制も撤廃しないと声明していました。だからなおのこと、憤激を招いたのでしょう。

各弁士が天皇制の打倒を主張するたびに、会場から「そうだっ」「天皇制打倒っ」という声が上がりました。会場は自由を得た民衆の熱気に包まれ、異様な盛り上がりでした。

—— 先年、大原社研では占領期の左翼出版界の実情について、佐和慶太郎さんから聞き取りをしました。佐和さんは1935（昭和10）年4月、高野実や内野壯児らと人民戦線を啓蒙する『労働雑誌』を創刊し、占領期も政治評論誌『人民』（1945年11月）や、権力の腐敗や不正を暴露する『真相』（1946年3月）を発行し、また言論・出版界の戦争責任追及の先頭に立たれた。

岩田 私は佐和慶太郎についてよく知っています。彼は全協・日本出版労組のオルグをしていた時期がありました。佐和は私にとって、数少ない信頼しあった同志の1人です。

—— 佐和慶太郎さんも、飛行館における集會に出席されたそうです。佐和さんは、集會において各弁士が、非合法期の日本共産党と全協の活動に対する検証や自己批判がなく、ただただ感情を高ぶらせて、観念的に天皇制打倒を叫んでいるのを見て愕然としたそうです。

また伊藤憲一さんが演説中、興奮のあまり壇上で身を崩して、2人のMP（米軍憲兵）に支えられて身を起こす場面があったそうです（法政大学大原社会問題研究所編『証言占領期の左翼メディア』御茶の水書房、2005年、279頁）。

岩田 伊藤の演説は醜態だった。あれは演説なんかじゃない。自らの演説に酔い、泣きじゃくり、興奮のあまり身を崩すなんてね……。けれども伊藤の演説で、聴衆がむしろ天皇制打倒の決意を高めたという効果もあった。

MPが大会の警備を担う

岩田 自由戦士出獄歓迎人民大会は、戦後日本における最初の集會でした。はたして集會が認められるのか、われわれは不安だったが、これが問題なく認められた。集會の申請に行った私自身、拍子抜けした。記憶が少し曖昧だけれども、当時、警視庁内にアメリカ第8軍のオフィスがあって、担当将校も集會の申請を認めた。

とにかくGHQが1945年10月4日に人権指令を発して以降、状況が劇的に変わったのです。私の場合、渋谷憲兵分隊の福島大尉らの監視は8月中に止んだが高高の監視はつづいていた。それが10月4日以降、ピタッと監視が解けた。

先ほど集會の壇上で伊藤憲一が興奮のあまり身を崩して、米軍のMPに抱えられて身を起こしたという話がありましたね。むしろ私が驚いたのは、集會における警備——飛行館の講堂や入口、周辺を警備していたのが警視庁ではなく米軍のMPだったのです。

とにかく自由戦士出獄歓迎人民大会は、米第8軍のMPが多数動員され、彼らの警備のもとで開催された。これはまことに異様な光景だった。

GHQへの感謝デモ

岩田 自由戦士出獄歓迎人民大会は、午後5時少し前、実行委員会が提案したGHQに対する感謝デモの実施を決議して終わりました。このデモは人権指令をはじめ、日本が、GHQの尽力によりデモクラシーと平和の国家として再建の途についたことに対して、日本人民として

感謝の意を表するという名目で企画されたものでした。

GHQに対する感謝デモは、雨が少し止む気配だったのですぐに実施された。デモの責任者は椎野悦朗です。椎野、中西伊之助、金斗鎔、太田慶太郎、伊藤憲一や、解放運動犠牲者救援会の連中、私も先頭に立ちました。

—— 参加者は？

岩田 7～800人、いやもう少し多かったかもしれない。デモ行進中、飛び入りで列に加わった人もいたからです。

「府中組」の出獄式も、自由戦士出獄歓迎人民大会も、またGHQに対する感謝デモも、日本人民と朝鮮人民が連帯して実施したところに特徴があったと思いますね。同じ抑圧された人民として、連帯と共同の精神が集会やデモにみなぎっていました。

GHQに対する感謝デモは、急ごしらえの赤旗や「天皇制打倒！」「戦争犯罪人を処罰せよ！」といったプラカードを掲げて出発した。日比谷交差点をへて、GHQ本部があった第一生命館＝第一相互ビルに到着したのは夕刻6時近くだった。

不思議だったのは、このGHQへの感謝デモを先導し、警備を担ったのが米軍のMPだったことです。またデモ行進中、あちこちから「進駐軍万歳っ」「解放軍万歳っ」という声が上がった。音頭をとったのは椎野と伊藤憲一で、デモ隊がGHQ本部に到着してからは「マッカーサー元帥万歳っ」を繰り返し唱和した。

GHQはデモを歓迎した。その証拠に、マッカーサー元帥の副官サザランド少将が実行委員会の代表者と面会することになり、少将から直接「民主主義日本の再建のため共に尽力しよう」という挨拶がありました。

GHQがわれわれのデモを歓迎したのは、これが最初で最後です。われわれは1945年12月

に、海員（全日本海員組合）に働きかけ、引揚げ船乗務員の待遇改善や便数を増やすようGHQに陳情デモを取行したが、私らがGHQ本部に到着した途端、解散を命じられた。このデモを機に、GHQに対する陳情は禁止された。

GHQと米軍が「解放軍」でなかったことは、1946年5月19日の食糧メーデー＝飯米獲得人民大会（皇居前広場）が証明しています。集会は警視庁というより米軍MPが警備を指揮し、なにかあれば弾圧の態勢を整えていた。マッカーサー元帥が「大衆デモは認めない」という声明を発したのは翌日のことなのです。

—— 「暴民デモ許さず」の声明ですね。

岩田 そうです。1947年の2・1ストもマッカーサーの命令で中止となった。GHQ＝米軍は、日本占領軍であって、日本人民の「解放軍」では決してなかった。アメリカは日本人民を「解放」したと言うけれども、仮にそうであっても自らの利益のために解放したにすぎない。

東宝争議に対する弾圧はすさまじかった。東宝争議の拠点は砧撮影所で、私が住む世田谷区内あり、私も闘争本部に詰めていたが、第3次争議（1948年4月）においては米軍の戦車が出動し、当時「来なかったのは米軍艦だけ」といわれたくらい熾烈だった。

GHQ感謝デモに異論

岩田 GHQに対する感謝デモは徳田が提案しました。しかし「府中組」では志賀義雄や金天海が異論を呈し、黒木重徳も躊躇していたように思う。私もしっくりいかなかった。

—— なぜですか。

岩田 GHQの主体は日本を軍事力で負かした米軍です。米軍はアメリカ帝国主義の軍隊です。占領統治の本質は、日本が二度とアメリカに敵対しないための改革であり、デモクラシーや進歩性があっても、そこにはアメリカ帝国主

義の論理や意図が込められていた。

GHQないしマッカーサーの民主化政策に二面性がある、日本人民に対する真実の「解放軍」ではない。東京大空襲や、広島と長崎への原爆投下——これらはアメリカ帝国主義の日本人民に対するジェノサイドですよ。

GHQの占領統治を民主化という視点のみで見てもならないと思います。第2次世界大戦については、日独伊の新興帝国と米英帝国における戦争、あるいは日独伊のファシズムに対する米英ソを主体とする反ファシズム戦争、という枠組みで規定されるのが通例です。

もちろん毛沢東の中国をはじめ、日本軍部の侵略や抑圧を受けたアジアの諸民族にとっては、日帝に対する民族解放戦争という性格もありました。

徳田は第2次世界大戦について、ファシズムに対する反ファシズムの戦争という側面をとりわけ強調していた。ソ連は反ファシズムの理念で参戦し、その結果、連合国が勝利したのだと。

—— そうした要素もありますね。

岩田 そうかな。ソ連の参戦も問題です。これは日ソ中立条約を破ってのものだった。当時、日本共産党において、ソ連が日ソ中立条約を破って参戦したことを問題にすることはタブーだった。徳田は、ソ連が対日理事会のメンバーであり、この一事をもってしてもGHQが「解放軍」なのだ……。

はたしてそうなのか。ソ連参戦の経緯についての研究がありますね。ソ連は当初より北海道の占領を意図し、実際に北方4島を占領した。ソ連も帝国主義の力学にあったのです。

徳田はソ連やスターリンに幻想を抱いていたと思いますね。私は徳田にシベリアに抑留中の日本兵の帰還促進について、ソ連代表部のデレヴィヤンコ中將へ申し入れるよう提言したことがありました。1947年8月のことです。当時、

徳田は「親父さん」と呼ばれ、大人の風貌があり、些事を気にしなかった。けれども私がシベリア抑留中の日本兵の帰還促進について提言したとき、徳田は「岩田っ、お前何を言うのだ」とすごい剣幕で私をしかりつけた。

政治犯釈放の意義

岩田 質問書にありましたが、1945年10月における政治犯の釈放とその歴史的意義について述べて本日は終わりにしましょう。私自身、少々疲れました。

政治犯釈放の意義——もちろん徳田、志田、黒木ら「府中組」だけでなく、前後して全国各地の刑務所で政治犯が釈放されましたけれども、やはり「府中組」の出獄を第一義的に考えなければならぬでしょう。

「府中組」の出獄は日本共産党が歴史上、初めて合法政党として存在し、戦後における日本政治を革新の方向で担う起点になっています。党の再建も「府中組」が中心となって担い、また日本社会運動も「府中組」のリーダーシップのもとに再出発しています。

戦争中に、あるいは敗戦を迎えた時点で、宮本顕治が巣鴨刑務所で、あるいは移送された網走刑務所において獄中闘争を試みた事実はない。

市川正一が1945年3月に宮城刑務所で獄死した。宮城刑務所にはなお袴田里見、春日庄次郎、二見敏雄、田島善行らの政治犯がいたわけだけれども、彼らが獄内で果敢にたたかい、市川正一の救出に尽力し、あるいは党的活動を試みたという事実も聞かない。

戦争中や、1945年10月10日以前、豊多摩刑務所や府中刑務所において獄中闘争を展開し、しかも日本共産党の再建構想をもって活動を継続していたのは「府中組」だけなのです。

だからこそ日本共産党は「府中組」を主体に合法再建をはたし、GHQや米軍とも果敢に対

峙し、占領期において民主主義革命の旗手となり得たのです。

徳田には家父長制的な指導や子飼い幹部の重視など、いくつか指導上の問題がありました。そのワンマンぶりもよく知られています。けれども日本共産党の再建における徳田ら「府中組」のリーダーシップと活躍は明白で、これは厳然と認めなければならない。

この点もあげておきたい。戦後日本の社会運動は政治犯の釈放をもって燎原の火のごとく広がりました。占領期の日本社会運動は日本共産党を軸に、あるいは共産党を意識して動いていました。

1945年11月2日に結党をみた日本社会党は、GHQの人権指令と「府中組」の釈放をきっかけに結成が急がれた経緯があります。戦争が終わっても合法左翼、すなわち社会民主主義者の立ち上がりは遅かった。われわれ共産党も、なお治安維持法が存続していたもとでびびっていた。けれども「府中組」の出獄によって決起する条件と決意が固まり、日本社会運動における復活・再建の胎動が見られた。

日本社会運動の復活は、やはり「府中組」の出獄をテコにしています。これらの事実はいずれも否定できない。GHQは1945、6年当時、総同盟を排撃していました。占領期は圧倒的なパワーで、日本共産党が日本社会運動を牽引していたのです。

運動主体の弱さ

岩田 天皇制抑圧機構の解体、日本軍国主義者の公職追放、労働者の統制と動員組織＝産業報国会の解散、婦人参政権の付与、労働組合法の公布、教育基本法の制定など、戦後改革のほとんどがGHQの指令で実施された。これらは「上から」の改革で、民衆闘争を土台にしたも

のではない。

旧体制＝天皇制体制は、自らを清算ないし改革する意思など毛頭なく、むしろ執拗にGHQの改革に抵抗を試みた。

他方で、われわれ非合法左翼は戦争中にこてんぱんにやられ、戦争が終わって2か月も鎮静を余儀なくされた。戦後日本の起点で、われわれに旧体制と対峙してこれとたたかう条件など無かった。

—— 変革主体が形成されていなかったと？

岩田 そうです。われわれがGHQの民主化政策に感謝し、米軍やGHQを「解放軍」と理解したのもある意味で正しいかもしれない。政治犯の釈放が戦争が終わって2か月後のことだなんて……。その釈放も自ら共産党の要求や民衆闘争を土台にしたものでなく、GHQの指令によるものだった。

顧みれば、むしろ旧体制の側が知恵を働かせ、GHQを巧みに利用して戦後における民主主義革命の骨抜きを試みた。幣原喜重郎内閣と吉田茂内閣は旧体制の意志を汲み、GHQと連携しあるいは妥協して、ぎりぎりの線で体制の温存を図ったのです。

日本の左翼が——合法左翼であれ、非合法左翼であれ、天皇制権力になす術なく抑え込まれ、戦争体制に組み込まれた理由はいったいどこにあったのだろう。佐和慶太郎とは全協のオルグ時代からの知り合いです。佐和はよく言っていました。非合法期における日本左翼＝日本共産党は、むしろ自滅したのだとね。

—— 本日は有難うございました。次回は、板橋事件——隠匿物資摘発闘争と食糧闘争を中心にお話しをお願いいたします。

岩田 承知しました。鋭意、準備いたします。(完)